ナオヤのこの贈り物への拒絶感が薄れるわけではなかった。従弟はもはや個人的な感情などを持つ事を許される立場ではないし、彼からの贈り物もまた個人的な物にはなりえない。少なくともナオヤが喜んで受けいれられるものではなかった。

「奴らから貰った金で俺にプレゼントだと？　笑わせるな。無神経にも程がある。今更お前が俺に寄越せる物などありはしないだろう」

家族の元を去り救世主として天使と信者達に囲まれて過ごす従弟の生活は、全て天使達に管理されている。人としての生活を営む為の金銭の出所は知らないが、恐らくは神の為に信者が捧げたものか、天使と取引した日本政府の支援だろう。今や彼の着る服も食べる物も、全てが神の子の為に用意されたものだった。彼の自由になる持ち物などもう一つも無いはずだ。

「ごめんなさい。またナオヤの嫌がる事しちゃったね」

俯いたままそう言って、従弟は身を翻した。

引き戸を開けたその時に雨の最初の一粒が敷石を濡らさなければ、ナオヤは従弟をそのまま帰していただろう。雨は見る間に激しくなった。

二人は同時に空を見上げた。夕夜は傘を持っていないようだったが、使役する悪魔を使えば濡れずに帰る事は造作もない。だがナオヤの前で悪魔を呼びたがらない彼はそのまま出ていこうとした。

「待て。雨宿りくらいはしていってもいい」

躊躇った従弟を強引に引きずりこんでナオヤは引き戸を閉めた。包みを抱えたまま従弟はおとなしくナオヤについて座敷に上がった。

夕夜は所在なさげに正座してナオヤを窺っている。相手にすればひどい罵りの言葉しか吐けないだろう自分を見越して、ナオヤは黙って座敷を出ようとした。雨宿りだけさせて帰せばいい。

「待って、ナオヤ」

少しだけ強い口調で、ずっと離さなかった包みをもう一度差しだしてくる。

「俺はこんな物要らないと……」

「違うから！　これは本当にオレから……封鎖前から持ってた財布に入ってたお小遣いで買ったんだ。それでも嫌かもしれないけど、だけど……」

「だから俺に受けとれと？」

「……後で捨ててもいいから」

そこまでして喜ばれない贈り物を押しつけようとする意図が解らなかったが、問い詰めはせずに頷いた。

「棚の上に置いておけ。捨てる前に中を見るぐらいはし